

豊浦寺の調査（飛鳥藤原第 133－9 次）

592 年に推古天皇が即位した豊浦宮は、飛鳥時代の始まりを告げる宮殿として有名です。彼女は 603 年に小墾田宮へ移り、その後、豊浦宮の跡地を寺にしたと伝えるのが豊浦寺です。僧寺である飛鳥寺に対し、尼寺として知られていますが、飛鳥寺と同じく、造営者は蘇我氏でしょう。現在の向原寺の境内が古代の豊浦寺の講堂にあたり、今回、納骨堂建設に伴って、13 m²を発掘しました。

厚い盛土のため、ごく狭い幅しか深く掘り下げられませんでした。予想どおり講堂基壇の硬い版築層を検出し、さらにその下には、地表下 1.7 m の深さで砂利敷が広がることを確認しました。

過去、向原寺の境内では、1985 年に講堂の南端を調査しており、基壇の下からは豊浦宮の一部とみられる掘立柱建物も見つかっています。これらの成果をあわせると、講堂基壇の南北規模は 23 m 前後になりそうです。砂利敷は、豊浦宮の建物の周囲に施された舗装と思われます。一帯に、豊浦寺と下層の豊浦宮の遺構が良好な状態で残っていることを確認した意義は大きいといえるでしょう。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 小澤 毅）